手をつなぐとも
等友
S60・10・1生

〒111-0041
台東区元浅草
2－10－17
3841－2844
真宗大谷派
勝龍山
等覚寺
住職
朝倉創

令和6年3月
第113号
責任編集
朝倉 翔

境内の木瓜（ボケ）の花

死にむかって
進んでいるのではない
今をもらって
生きているのだ

鈴木 章子

癌によって四十七歳で夭折された鈴木章子さんが闘病中に四人の子どもたちへ送った詩。

様々な関係性の中で育まれ、いつ終えていくか分からない「いのち」を私たちは軽んじてはいないか。自分のいのちでなく、大きな繋がりの中で賜ったいのちとして生きることで、本当に今を大切に思うことができる。自分の生き方を見つめ直し、今を生きる喜びをいただくのが、仏様のはたらきであることを鈴木さんの言葉から感じずにはおれない。

（真宗大谷派難波別院ホームページより）

はじめに

早いもので令和六年も二ヶ月が過ぎようとしています。今回の等友では、昨年十月の報恩講でのご法話の抜粋と、今年一月の新年法要でのお話の一部を紹介いたします。

昨年の報恩講では、久しぶりに髙徳寺の新井住職（等覚寺住職の尊敬する先輩であり、飲み友達）をお招きしご法話をいただきました。それではどうぞ。

法話紹介

報恩講（二〇二三年十月）の法話

◎私たちと煩悩

周利槃特（しゅりはんどく）はお釈迦様のお弟子さんです。本当に物覚えが悪い人で自分の名前すら覚えられないという少年だったそうです。周利槃特にはすごく優秀なお兄さんがいました。そのお兄さんがお釈迦様の弟子になった時、僕もお弟子になりたいと、一緒にお弟子になったんですが、なにせ何にも覚えられない。お題目も覚えられないし、宿坊のルールも覚えられない。しまいにはおじいさんのところに帰りなさいとまで言われて泣いていたら、お釈迦様が一本のほうきを持って、「これを渡すからこれで毎日、垢を落とし塵を払えって言って掃除しなさい。」と言われたそうです。毎日毎日掃いていると、大体要領の良い人は、目に見える範囲だけを掃除するようになりま

すね。この方は、なにせ愚直ですから、すみずみまで全部掃除するわけですよ。でも少し経つとすぐまた埃が溜まってるんです。なんでだろうと考えました。それは心の中の垢だったんじゃないか。心は綺麗だと思っていたけど、汚れてるんじゃないかと思い至ったそうです。そしたらですね、顔がもう神々しくなって、ずっとずっと成長された。ある時お釈迦様が宿坊に帰ってきてですね、周利槃特よ、お前はもう大丈夫だから、ほうきをもう置いてもいいぞって言ったんですけど、いや、これが私の行ですと、生涯ずっとお掃除をされたそうです。その時わかったのが、垢ですね。これが取れないんですよ。もう落としても落としても取れない。これは一体何だ。これは、煩悩というものだったんですね。

もうだいぶ前ですけど、近田昭夫先生という方のお話を聞いた後、この煩悩についてモヤモヤしていたんで質問したわけです。煩悩というのは泥だと例えると、体に泥がついていればシャワーで洗い流せば取れちゃいますよね、と。すると先生は、あなたが泥人形なんですよっておっしゃいました。付いていたのではなく、私自身が泥だったんだと。それを聞いて納得しました。だから周利槃特のあの垢も、落ちないんですよ。私自身が消えないと煩悩は消えない。煩悩というのは悪いものだと思われてるから、消そう消そうと思うけど、実際は楽しいこともあるじゃないですか。美味しいもの食べたら美味しいし。でも嫌いな人と美味しいもん食べても美味しくない。それ全部が私なんだ。そのことをですね、気が付いてくれって、あなたが煩悩なんですよって言ってずっとずっと阿弥陀さんはあのように立ち続けています。

◎慣れていく心

大無量寿経の下巻に、「汝立ちてさらに衣服を整うべし」という言葉があります。阿難さんを知ってますか。お釈迦様のカバン持ち

と言われた、親戚関係でもあるお弟子さんの一人です。この方はお釈迦様がご説法される横でずっとずっと聞いていたんですけど、お釈迦さまのお言葉が全然響いてこなかった。そしてついにある時から、阿難さんはスポンジが水を吸うように、お釈迦様のご説法をどんどん身につけていきました。そんなある日、もうわかったと、自分なりの答えを握りしめて、もうこれでいいって言って、よっこらしょって歩みを止めちゃったんです。歩みを止めてしまった阿難に対してお釈迦さまが言われた言葉が、「汝立ちて更に衣服を整うべし」でした。自分自身の問いや歩みを止めてはいけない。立ち上がって、そして衣服を整える。これはお洋服の乱れを直したりとかそういうことじゃないんです。私達が今いるこの環境。時代とか社会とか生活習慣ですね。時代社会とか自分を取り巻くもの全てを整えて、それを縁として歩みなさいよっていうのが、この言葉なのです。これすごく大切な言葉だなと思います。

私達は生きていると、いろんな嫌なことありますよ。苦難とか、困難とか、災難があります。これらは無い方がいいんです。無い方がいいんだけど、困難苦難災難に合わない人は誰もいません。必ずあるわけです。でもその苦難を縁として自分が生かされていく。それはありがたいことじゃないか。有ること難しで有難い。今日はそういったことが全くなく、邪魔する縁が一つも無かったから皆さんこうやって報恩講にもお参りに来れた。こういうのも素晴らしいことだと思いませんか？それをやっぱりですね、慣れちゃって、当たり前のように思ってしまっている自分がいるわけです。私の好きな言葉でおかげさんっていう言葉があります。お寺の寺報の名前もおかげさんにしました。そのおかげさんというのは、自分を成り立たせている影となったようないろんな存在。人もそうだし、物もそうだし、空気もそうだし、それを全部合わせ

たかげに、おとさんを付けて、おかげさんなんですね。この念珠もそうです。紐で繋がったかげに、おとさんを付けて、おかげさんなんですね。この念珠もそうです。紐で繋がってますけど、この真ん中の親玉が自分だとしたら、お父さんお母さんとお兄ちゃんお姉ちゃんとか友達とか親戚とか八百屋のおじさんとか。それらは全部繋がっていて、それが私を成り立たせているんだと。そういうことをいただくとですね、本当に誰とも比べる必要のない私を生きたいと思うわけです。

◎法事は大切

私たちは煩悩だから知らず知らずに大切なことも忘れてしまい色褪せていきますが、なむあみだぶつとお念仏すると、いまここ私というところに再び立たせてくれる。誰とも比べる必要のないあなたを堂々と生きなさいと、先に亡くなった大切な方々も、声なき声で毎日発信してくれるんですね。

ご法事っていうのは、自分の縁のある方と一緒に、日時を決めてお参りするわけです。自分とこの方は一体どんな関係があったのだろう、この人がお生まれ下さらなかったら、今ここに座ってることができるのかなとか、あの一言がなかったら、今の自分はないんじゃないかなとか、いろいろなことがありますね。だから、ご法事っていうのは大切。三回忌や七回忌までいいとか言っちゃいけません。もうやれるまでやって、やれなくなったらやれる人にバトンタッチです。自分とその人とのエピソードがあるでしょう。みんないろいろなエピソードを持ってます。それを集まった人同士で語り合う。その時に初めて聞く話があったら、改めてその人と出遇い直すことができるでしょう。そしてその人と会ったこともない小さい子とかもね、おじいちゃんってどんな人だったのって話せばその子も初めて出遇えますね。年回表に当たっていなくても、祥月命日にはみんなで集まっ

てそういう話をする。そして忘れない。それが大切でその方は、声なき声でずっとずっと阿弥陀さんと同じ願いをかけてくれている。そのことをお念仏という行で、いつも「今ここ私」に引き戻してくれる。これが功徳です。

そのことをですね、生涯かけていろんなご本を書いていただいたりですね、今日お勤めしたこの正信偈、正しく信じる歌。これは親鸞聖人が生涯かけて作られた歌です。そのことをいつも勤行と言ってお勤めするわけです。今日は報恩講ですから、通常のご法事では見ないような赤い三角の打敷がかかっていたり、お花もすごいゴージャスです。造花はいけませんよ。なぜなら生花は最初は綺麗ですけど、時間が経つとだんだんだんだんしぼんできて枯れてきますね。これはいのちの姿である生老病死を表し、教えてくれている。だからお花はこちらを向いています。それからお灯明です。こうしたお飾りやお経の文字も目に見えての教えだし、お勤めもちゃんと耳に入ってくる教えです。こうしたことをいつも生活の中に入れながら、いろんな方々の願いとか、阿弥陀さんの願い、親鸞さんの教えをいただく。それがですね真宗門徒の日頃の生活。そして今日は報恩講。その親鸞さんの恩に報いる法事です。報恩講はもう真宗門徒のお正月と言っても過言ではありません。こうしたことをいただきながら、今日からリセットしてまた歩み出す。汝たちてさらに衣服を整うべしということです。

講師紹介

髙徳寺住職　新井先生

優しい語り口調でいつも楽しく
ご法話して下さいます。

義捐金？義援金？

「捐（えん）」という字をご存じの方いらっしゃいますか。これは明治時代まで使っていた字で、今でいうと「捨てる」という意味の言葉だそうです。この義捐金という言葉を僕らも初めて知ったのは恥ずかしながら東日本大震災の時でした。浅草仏教会という宗派を超えた集まりがあるのですが、そこで義援金を集めようということで、プリントが回ってきた時にこの字を使っていたんです。今ではこの捐という字が常用漢字ではなくなったので、代わりに援という字を当て字として使うようになりました。ではなぜ私たち僧侶が今日でもこの字を使っているのかというと、実は意味があるんです。ある先生から教わったのですが、この捨てるというところに大事な意味があるんだそうです。今では応援という意味も込めて使っているけれど、誰が応援するのかというと、「私」が応援するんですよね。私が被災者の方を応援するんだと。そのためにお金を差し上げるということになる。だから、この義援金で困ることがよくあるそうです。使い道はどうするんですかとか、聞く方も多いそうなんですよ。募金した団体がちょっと抜いちゃうんじゃないかとか、この団体は信用できないから違う団体から義援金を送ろうとかね。どうも思い通りに使われていないと文句を言う。そういうことになってくる。これが今の義援金のあり方であるそうです。昔の義援金というのは今申し上げた通り、捨てるという意味で義捐ということを使っていた。もう私は捨てるつもりでお渡ししてる。だからどうぞあなたが使いたいように使ってくださいと、みなさんが役立つように自由に使ってほしいということで、この字を使っていたそうです。

　このお話って、お布施と通ずるんです。お布施っていうのはそもそもどんな意味かというと、布施行と呼ばれる修行の一種だったん

です。どういう行かというと、喜んで捨てると書いて喜捨。喜捨という行なんです。自分の持ってるものとかお金とか食べ物とかを差し上げる。しかもその見返りを求めないんですね。見返りを求めず差し上げることで、私自身に必ずある執着心。お金にとらわれる心、食べ物にとらわれる心。そういう心を断つために、布施行というのは始まったそうです。

ボランティアに行かれた方のインタビューでよく聞くでしょう。被災者の方を助けようと思って来たんだけど、逆に被災者の方から私が元気をもらいましたって。あれこそまさに布施行のご利益です。自分が相手のために見返りを求めずやったつもりが、実は相手からもいただけるものに気付けたと。これこそが本当に大事なことだと思うんですね。

釋 創龍

（令和六年新年会法話より一部抜粋）

行事紹介

令和六年一月二十八日に新年会法要をお勤めいたしました。コロナ禍ではできなかったお食事や抽選会も行い、とても楽しい時間を過ごすことができました。

編集後記

こんにちは。翔です。今年は年始からいろいろな事が起きて、のんびりとしたお正月というわけにはいきませんでしたね。個人的にも大みそかにコロナに罹ってしまい、年末年始を一人で隔離しながらひっそりと過ごしておりました。。。

さて今回は義捐金のお話をご紹介しました。なかなか見慣れない字ですが、意味がわかるとなるほどな、と思いますよね。

等覚寺でも令和六年能登半島地震災害に対し、義捐金を募集しております。お線香をお渡しするところに義捐金箱を設置いたしました。この義捐金は本山を通じて被災地へと届けていただこうと思っておりますので、ぜひご協力をお願いいたします。

令和六年行事予定

三月二十三日（土）	彼岸会・永代経
三月十七日～二十三日	春のお彼岸
七月十三日～十六日	お盆
七月十五日（月）	盂蘭盆会法要
九月十九日～二十五日	秋のお彼岸
十月二十七日（日）	報恩講

◎お気軽にご参加ください。

※ **あくまで予定です。開催が確定した行事は必ず事前にご案内いたしますので、別途ご確認ください。**

備忘録　～法事の準備～

○まずはお寺へ日程連絡

回忌の確認をし、ご家族で法要希望日を
お決めになりお早目にお寺へご連絡ください

○当日必要なもの

・お布施（ご先祖さま合同で実施する場合は、
ご先祖さま毎に包みを分けて下さい）

・お花代（本堂にお飾りする
お花代で、一万円の実費）

○ご希望によってお持ちください

・お供物

・過去帳やお位牌

・遺影（小さいもの）

○服装は華美でなければ平服でも結構です。

（ご参加される方同士でお話しされてお決めください）

※お寺へお包みいただく表書きは全て「**布施**」と書いて
いただければ結構です。浄土真宗の場合は「**読経料**」や
「**ご霊前**」という言葉は用いません。

備忘録　～お焼香作法～

○お焼香のタイミング

お勤め中に声が掛かりますので、それまで
お待ちください。順番には決まりはないので、
施主の方から前に出てご焼香ください

○お焼香作法

・焼香机の前に進み、合掌せずにご本尊を仰ぎ
見ます。赤い香盒（香入れ）の蓋を開けて香盒
の右に置きます。

・右手でお香を二回、香炉にくべます。（**お香を
額に頂くことはしません**）お香の乱れを指先
で直してから「南無阿弥陀仏」を称えて合掌
礼拝をします。

・自分の後にお焼香する方がいれば蓋はそのま
まにし、最後であれば蓋を閉めて自席に戻り
ます。

備忘録　～お葬式について～

○事前のご相談もお気軽に

亡くなられた後ではバタバタとしてゆっくり検討する時間がありません。お寺にご連絡いただければ葬儀までの流れなどご不明、ご不安な点のご説明もさせていただきます。

○葬儀の場所

基本的にどちらにでも伺わせていただきます。遠方でも泊まりがけでお勤めさせていただいておりますので気にせずにご依頼ください。また、可能な方は**ぜひお寺でご葬儀を**。故人が生前ご縁のあった等覚寺の本堂で、あたたかくおごそかなご葬儀をすることができます。

○葬儀の布施

この時お預かりする布施は通夜葬儀のお勤めの対価ではなく、亡くなった時をご縁にお寺の護持のためお納めいただくものです。どうぞお気軽にご相談ください。

備忘録　～ご納骨について～

○ご納骨のみはお受けできません

永代供養墓ではなく一般墓地をご利用の場合、浄土真宗の教義に則って、葬儀式をお勤めしてからのご納骨となります。式のやり方のご希望等ご相談に乗れる部分もありますので、**必ず火葬前にご連絡ください。**

ご披露

等友へのご懇志

加藤伊知郎様　川嶋浩明様　小島栄様
高橋愛子様　万代ゆき子様　（順不同）

いつもご支援いただきまして、誠にありがとうございます。この等友誌や等友会は、こうしたご支援から成り立っております。

令和六年 年回表

一周忌	令和五年
三回忌	令和四年
七回忌	平成三十年
十三回忌	平成二十四年
十七回忌	平成二十年
二十三回忌	平成十四年
二十七回忌	平成十年
三十三回忌	平成四年
三十七回忌	昭和六十三年
四十三回忌	昭和五十七年
四十七回忌	昭和五十三年
五十回忌	昭和五十年
七十回忌	昭和三十年
百回忌	大正十四年